

京都外国語大学・京都外国語短期大学
(2021年度の課題への対応結果)

2021年(令和3年)度に行った自己点検・評価では25件の課題がありました。2022(令和4)年度から2023年(令和5年)度末にかけて課題の改善に取り組みましたので、その結果を以下のとおり報告します。

評価対象：①2021事業計画における課題

②2021認証評価基準における課題

評価方法：担当する部署・学部等による点検・評価

評価水準：以下の4段階で評価

S：極めて良好な状態にあり、取り組みが卓越した水準にある。

A：良好な状態にあり、取り組みが概ね適切である。

B：軽度な問題があり、さらなる努力が必要である。

C：重度な問題があり、抜本的な改善が必要である。

評価結果：総括は[表1]、詳細は[表2]のとおり

[表1] 2021年度の課題への対応状況(総括)

| 2021事業計画における課題 | | 2021認証評価基準における課題 | |
|----------------|---|------------------|---|
| 対象項目数：17 | | 対象項目数：8 | |
| S評価 | 3 | S評価 | 2 |
| A評価 | 8 | A評価 | 6 |
| B評価 | 5 | B評価 | 0 |
| C評価 | 1 | C評価 | 0 |

(注1) 最終評価となる点検・評価委員会の評価結果を集計。

(評価結果の活用)

B評価、C評価であった課題については、担当する部署・学部等において課題の内容を再度確認し、継続して改善する意義や必要がある場合は改善に努めることとする。

[表2] 2021年度の課題への対応状況（詳細）

【2021 事業計画における課題】

| 課題 | 対応部署等 | 2023 年度末時点での改善状況 | 改善評価 |
|--|----------------|---|------|
| セキュリティポリシーの策定 | 総合企画部 | 情報資産管理台帳および規程を作成した。 | S |
| 経常費補助金（一般補助・改革総合）の算定基礎となる得点の改善 | 総合企画部 | 2023 年度の申請時の採点結果 大学 34 点（交付金増減率+1%） 短期大学 35 点（交付金増減率+2%） 課題であった「増減率をプラスの領域にする」を達成した。 | A |
| 指定校の志願結果の分析と入試戦略への活用 | 入試広報部 | 近畿圏の私立学校（約 120 校）数の強化や、出願基準の緩和等をおこなったが 2023 年度 301 人、2024 年度 228 人 前年度比 75.7%（3 月 6 日現在）の結果となり目標には届かなかった。見直した出願基準の緩和については今後検討する。 | B |
| 接触者の志願率向上 | 入試広報部 | 進学相談会、高校内ガイダンス、高校訪問、オープンキャンパス等、効率的に取り組んだが志願者については、2023 年度 3,586 人 2024 年度 2,703 人 前年度比 75.3%（3 月 6 日現在）の結果となり、目標数値には届かなかった。 | B |
| 日本語運用能力の低い外国人留学生への日本語学習支援体制の充実 | ランゲージセンター | ①入学手続き書類の活用・案内の多言語化・関係各所との連携で日本語テストの周知徹底を図り、学習希望者全員に日本語授業を案内した。 ②NINJA 日本語セッション延べ利用者数は 22 年度の 107 名から、2023 年度 330 名に増加した。 | S |
| 協定書の学内管理体制の整備 | 総合企画部 | 2023 年度は国際交流協定の整理に取り組んだ。今後の国際戦略に基づき、学科毎の必要協定校数を算出し、183 校の国際交流協定を 150 校に見直しすることを決定した。 | A |
| 課外活動や産官学連携体制の充実 | 大学事務局 長、法人部 | 2023 年度に事務組織の改編をおこない、課外活動（学生部所管除く）や産官学連携の企画立案及び学内外の調整を担う部署として総合企画部企画課を立ち上げた。2023 年度は近隣商店街との翻訳プロジェクト、地元企業との連携による大学公式グッズの制作、プロバスケットチーム「ハンナリーズ」への学生ボランティア派遣等、具体的な施策を進めている。また、京都府や京都市と個別に協議を始めており更なる連携を進めている。 | S |
| 事業計画の点検・評価の結果を踏まえ、より教育改善・改革に資する計画へ傾斜的に予算配分 | 学長室 | 事業計画の点検・評価結果を活用した予算編成の仕組みは引き続き検討中である。 | C |
| 自己点検・評価運営委員会と評価部会の整理 | 学長室 | 自己点検・評価の効率を高めるため 2022 年度に自己点検・評価運営委員会と評価部会を統合し、点検・評価委員会へと一元化した。 | A |
| 「本学の魅力」の整理と効果的な広報 | 入試広報部 | 通常広報（大学基本情報）以外の広報強化について、ともに計画通り実施。紙媒体や WEB 媒体だけでなく、WEB 広告の実施、SNS（Instagram・YouTube）による認知の拡大、MA システムを使用し LINE、メルマガ配信などにより歩留まり率向上に特に力を入れたが、志願者数（延べ） 2023 年度 3,545、2024 年度 2,678 前年比 75.5% ※2/28 付同日比データ | B |

| 課題 | 対応部署等 | 2023 年度末時点での改善状況 | 改善評価 |
|---|-----------|--|------|
| 指定校をはじめとする本学と繋がり深い高校への積極的な情報提供 | 入試広報部 | 指定校については、高校訪問をはじめ高校内ガイダンス、模擬授業の依頼があれば積極的に参加し対面広報に力を入れた。 また、必要に応じて情報交換も行い連携強化を図った。 | A |
| アドミッション・ポリシーに沿った入学者受入れ状況の検証 | 入試広報部 | 入試制度を精査、見直しをする際には、アドミッション・ポリシーを念頭において行った。新入生アンケートにおいて、「入学時に期待する能力、意欲、態度などを理解しているか」の質問において、2022年度は 79.7%、2023 年度は 71.1%の新入生が理解しているという回答があった。 | B |
| 入学前及び在籍している外国人留学生に向けた本学の支援体制の分かりやすい提示 | 国際部 | 留学生別科用のホームページの内容・デザインを一新し、支援体制について明記した。現在、2024 年度の新なるホームページ更新の準備を進めており、より見やすい情報提示について検討している。 学部外国人留学生および留学生別科・交換留学生を対象とした入学後のオリエンテーションでは、ランゲージセンターの学習支援や国際部学生スタッフ (Student Ambassadors) による生活支援体制について説明する時間を設けている。 | A |
| 初修外国語専攻の学生へのピアサポート体制の充実 | ランゲージセンター | ①「Have a Chat」における学生スタッフを外国語学部 9 学科の全言語を揃える体制を整えた。 ②「Have a Chat」スタッフに対する教員主導の研修を月に 1 度実施し、スキルの向上やルールの徹底化を図った。 | A |
| ピアチューターを毎年安定的に確保するための仕掛けや環境づくり | ランゲージセンター | ①学生の「次は自分が PT に」という意識を促すため、正課「English Seminar」(春・秋ともに 10 クラス)に PT が参加、PT の活動内容や自身の英語の勉強方法について英語でのプレゼンを行った。 ②チューターが PT をロールモデルとして認識するよう毎週の研修で PT 自身のスキルや意識を向上させた。 ③PT を推薦してもらった英米語学科に PT についての理解を深めてもらい、協力体制を強めた。 | A |
| Tandem Learning を持続可能なプログラムとするための業務内容や手順のマニュアル化 | 英米語学科 | 限られた連携機関ではあるが、活動を継続し (Barr 氏国立屏東大学)、研究発表や教育実践の発表、論文や著書の出版などを通して、実績やノウハウを記録に残し、学内外で類似プロジェクトの関係者と情報交換をし、さらなる知見を得た。又、学内で研究チームを立ち上げノウハウを共有、今後のパートナー機関のためのネットワークを広げた。 | A |
| 京都商工会議所観光・運輸部会とグローバル観光学科との連携強化 | グローバル観光学科 | 京都商工会議所と京都検定の集団受験の可能性について検討を実施した。 また外国人受験者を想定しての京都検定英語化を京都商工会議所が検討していることから、意見を求められた。そこでは、①単純な英訳では伝わらないために文化の翻訳が必要であること、②合格者に対するインセンティブを用意する必要があること、2 点について指摘をした。これにより今後京都商工会議所と本学科の間で検討を進めていく可能性を拓くことができた。 | B |

| 課題 | 対応部署等 | 2023 年度末時点での改善状況 | 改善評価 |
|----|-------|--|------|
| | | 上記のように京都商工会議所と本学科との連携体制は構築しつつあるものの、それは「事務局・会員部」との連携であり、「観光・運輸部会」との連携はいまだ手探りの状況である。今後は「事務局・会員部」を通じて「観光・運輸部会」への働きかけを強化していく必要がある。 | |

【2021 認証評価基準における課題】

| 課題 | 対応部署等 | 2023 年度末時点での改善状況 | 改善評価 | | | | | | | | | | | | |
|--|-------|--|------|----|------|-----|-----|-----|-----|-----|--|-----|-----|-----|--|
| 新カリキュラムにおいて「系統性」と「順次性」を学生へ具体的に提示（カリキュラムマップや科目ナンバリング） | 教務部 | 2023 年度カリキュラムマップを作成・公開し、体系的な教育課程を示す学修の「系統性」と「順次性」を提示することができた。 | A | | | | | | | | | | | | |
| 新カリキュラムにおいて教養教育全体の教育目的や教育効果、特色ある教育内容を具体化 | 教務部 | 2023 年度より共通教育機構を新設し、学則に明示したことで、独立した教員組織として学内での位置づけを明確にした。これにより本学の使命・目的にある「豊かな教養に基づく円満な人格と国際的視野」を実現するためにこれまで以上に学部を横断した全学的な教養教育を実現できる環境が整った。 | A | | | | | | | | | | | | |
| 現行カリキュラムにおけるアセスメント・ポリシーの策定と学修成果の可視化 | 総合企画部 | 2022 年度にアセスメント・ポリシーを策定し、それに基づき 2021 年度学修成果の可視化を実施した。今後は前年度の学修成果を翌春学期中に可視化し、点検するというフローを確立し、より効果的な教育の改善活動を実現するための基盤を整備した。 | A | | | | | | | | | | | | |
| 学修成果を中心とする IR データを活用した改善フローの確立 | 学長室 | IR 推進担当が作成した「学修成果点検報告書」を踏まえて教学マネジメントに関する委員会及び点検・評価委員会で課題対応方法を策定し、執行部会議で審議している。課題は、「事業計画を立案して取組む」と「通常業務において改善」に区別して取り組んでいる。なお、課題の改善状況は改めて自己点検・評価を行い、その結果はホームページ「内部質保証」で公開している。 | A | | | | | | | | | | | | |
| ディプロマ・ポリシーについて、学生の周知度・理解度の定量的な把握（在学生・卒業時アンケートなど） | 総合企画部 | 2022 年度から新入生・在学生・卒業時アンケートに「所属する学部・学科の教育目標（どのような人材の育成を目指しているか）を知っているか」という項目を設定し、定量的な把握を行っている。 2022 年度の回答結果は以下の通り、約 70%以上の学生が周知・理解を出来ていた。（認知レベルを 4 段階で尋ねており、肯定的な回答率を算出） | S | | | | | | | | | | | | |
| | | <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>大学</th> <th>短期大学</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>新入生</td> <td>80%</td> <td>73%</td> </tr> <tr> <td>在学生</td> <td>68%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>卒業時</td> <td>78%</td> <td>89%</td> </tr> </tbody> </table> | | 大学 | 短期大学 | 新入生 | 80% | 73% | 在学生 | 68% | | 卒業時 | 78% | 89% | |
| | 大学 | 短期大学 | | | | | | | | | | | | | |
| 新入生 | 80% | 73% | | | | | | | | | | | | | |
| 在学生 | 68% | | | | | | | | | | | | | | |
| 卒業時 | 78% | 89% | | | | | | | | | | | | | |
| 内部質保証の方針等についてホームページで公開 | 学長室 | 2022 年度、ホームページに「内部質保証」の特設ページを開設した。当ページでは内部質保証に係る本学の方針・規程、組織体制、点検評価結果、課題改善状況などを一元的に発信している。また、IR サイトもリンクしており、学修成果を積極的に学内外へ発信している。 https://www.kufs.ac.jp/about/evaluation/evaluation.html | S | | | | | | | | | | | | |

| 課題 | 対応部署等 | 2023 年度末時点での改善状況 | 改善評価 |
|--|-------|---|------|
| 学部(学科)・研究科レベルや授業レベルでのPDCAサイクルの確立 | 学長室 | <p>学部・研究科レベルでは、2022 年度より「学部・研究科別自己点検・評価を」を実施しており、以下の項目について点検・評価を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アセスメント・ポリシーに基づく学修成果 ・カリキュラムマップを用いた教育課程の体系性 ・シラバス <p>授業科目レベルでは、授業科目を担当する教員が授業アンケート結果、シラバス点検結果、IR サイトに掲載している学修成果、FD 研修会での教育改善などの知識・スキルなどを踏まえて次年度のシラバス及び学修指導の改善を行っている。</p> | A |
| IR 担当として配置されている専任教員の組織・制度的な位置付の明示化(辞令交付) | 学長室 | 2022 年度より IR 担当教員へ辞令を発令することで、制度上の位置付及び役割を明確にしている。 | A |